

富大考古通信



第 16 号

五箇山と塩硝

10年以上にわたり続けてきた南砺市での詳細分布調査が、昨年秋の平・上平地域の調査をもって終了した。この間、南砺市教育委員会の皆様ならびに地元の皆様より賜りました多大なご配慮に改めて御礼を申し上げたいと思う。

さて、最後の調査は五箇山合掌の里に宿をとり、夕食の郷土料理に一同舌鼓をうったのだが、別棟での食事からの帰り際に、宿のご主人がある演出をしてくださった。囲炉裏の火に白い結晶をふりかけると、花火のようにパチパチと音を立てて赤く燃え上がったのである。この白い結晶は、「塩硝（えんしょう）」と呼ばれる火薬の一種であった（「焰硝」「煙硝」とも書く）。

「塩硝」は、木炭・硫黄とともに黒色火薬の主成分となる「硝酸カリウム」のことで、五箇山では、「塩硝発酵」という珍しい方法で製造されてきた。織田信長と大坂石山本願寺との石山合戦の際に、五箇山の塩硝が石山本願寺に納められたという伝承があり、慶長10年(1605)には加賀藩への上納が行われていたことが文献の上から確認できる。

塩硝の生産工程はまず、数年をかけて「塩硝土」をつくることから始まる。6月ごろ、炉の周辺の床下に約3.6m四方、深さ2mの播鉢状の穴を掘る。穴の底に稗殻を敷き、その上に水気の少ない良質の土（耕作土や山林の腐植土といった肥沃なもの）と蚕糞（カイコの糞）および鶏糞を混ぜ合わせたものを積む。さらに、ソバ殻、ヨモギの葉や茎、麻の葉を干したり蒸したりしたものなどをその上に敷き詰め、再び土と蚕糞、鶏糞を混ぜ合わせたものを積む。こうして交互にそれらを積み重ね、最後に一番上から人間の小便を大量にかけ、その上に土をかぶせる。年に何度かの切り返しをおこないながら発酵させ、5～6年後にこれを掘り出す。

発酵の終了したものを「塩硝土」と呼び、底に口のついた土桶（つちおけ）という檜作りの桶に移し、上からまんべんなく水を振りかけながら、一昼夜かかってしみだしてきた濾水を釜で煮詰める。途中で草木灰を加えて濾過した濾液を煮詰め、最後に木綿で濾す。これを自然乾燥させたものが「灰汁煮（あくに）塩硝」である。数度にわたり精製を繰り返すと「中煮塩硝」、さらに「上煮（うわに）塩硝」となり、これを加賀藩へ納めていた。

塩硝製造の原理は、蚕糞や鶏糞、人尿に含まれている尿素（ $\text{CO}(\text{NH}_2)_2$ ）が、土壌中の「硝酸菌」を中心とした微生物の作用を受けることで脱炭酸されてアンモニア（ NH_3 ）となり、これが酸化されてまず一酸化窒素（ NO ）となる。さらにこれが酸化されて過酸化窒素（ NO_3 ）となり、これに水が付いて硝酸（ HNO_3 ）になる。一方で、ヨモギの葉茎や麻の葉などの植物や、草木灰には多量のカリウム（ K ）が含まれているが、これも発酵によって組織から離れると硝酸と結合し、火薬である硝酸カリウム（ KNO_3 ）ができる。

五箇山では、今から400年も前から、このような化学変化を踏まえた塩硝発酵という微生物の利用が行われてきたのである。

（次山 淳）

〈参考文献〉

米原 寛「塩硝と和紙」『越中五箇山平村史』上巻 平村 1985

小泉武夫「灰の文化誌」富山市民俗民芸村連携企画展図録『灰』2007

馬路泰蔵編著『知られざる白川郷 床下の焰硝が村をつくった』風媒社 2009

目次

五箇山と塩硝

次山淳

修士論文要旨

「古代における地方寺院の成立と展開 ―飛騨国の事例を中心に―」

三好清超

卒業論文要旨

「富山県ウワダイラ I 遺跡における剥片生産技術の再検討」

山場愛弓

「貝塚からみた縄文時代の生業形態の再検討」

金田朋子

「圀形埴輪の研究 ―分布と出土古墳からみた圀形埴輪の性格について―」

寸田彩加

「陶硯からみた古代越中国の識字層の広がり」

清水俊輝

「戦国期の越中において使用された山城についての検討―長大な豎堀をもつものを中心として―」

小谷望有季

修士論文中間報告要旨

「中世前期における大型総柱建物の発生について」

盛田拳生

修論・卒論発表会と追いコンのお知らせ
編集後記

修士論文要旨

古代における地方寺院の成立と展開 —飛驒国の事例を中心に—

人文科学研究科 2 回生 三好清超

本研究では、飛驒を題材に古代寺院の成立と展開を考える。検討資料として、古代寺院の発掘調査で大量に出土し、また散布からも古代寺院遺跡が推定される瓦を用いる。瓦を材料とすることは、瓦当文様と製作技術の系譜関係が、技術系譜を持つ工人の移動や遺跡の先後関係を検討する点で有効性が認められているためである。さらに、その交流関係を把握することで、当時の地域社会の実態や変化を知ることができると考えた。

方法として、これまでの研究で瓦当文様について飛驒との関わりが取り上げられた軒丸瓦の瓦当文様、製作技術の系譜を検討し、先後関係・年代観等を明らかにした。

結果として、飛驒での古代寺院造営開始は尾張元興寺跡の影響を受けた寿楽寺廃寺跡を嚆矢とし、その年代は 7 世紀第 3 四半期後半であった。その後、7 世紀第 4 四半期前半に信濃明科廃寺跡の影響を受けて伽藍は完成したものと考えられた。

展開としては、飛驒国内へは 8 世紀前半代に瓦製作技術が広がり、古代寺院の建立が進んだものと考えた。ここでは蓮弁に凸線で忍冬文を表現する文様と重弧文軒平瓦の製作技術からその順番を検討し、古川国府盆地の北部→高山盆地→古川国府盆地の南部の順で瓦製作技術が広がったことを述べた。

8 世紀の後半段階では、三仏寺廃寺跡と飛驒国分寺から出土する瓦について、技術系譜が認められることを明らかにした。三仏寺廃寺跡の出土瓦は、8 世紀前半の古川国府盆地南部への展開と、8 世紀後半の国分僧尼寺の瓦製作に大きく関わっており、奈良時代からは高山盆地が飛驒の政治の中心になったものと推察された。

山国であり、交通の便が悪い飛驒の地において、全国より遅れてでも国分寺を完成させることが、鎮護国家仏教の普及の上でも重要であったものと考えた。

天武・持統天皇の時代には、仏教がこれまでの氏族主体の仏教から、律令国家の擁護を志す国家仏教というべきものへと変わっていった。飛驒の古代寺院成立は 7 世紀第 3 四半期後半であり、その後 8 世紀前半代に国中に広がり、16 カ寺が建立されるに至る。まさに全国に仏教が普及して地方寺院が出現した時期と重なる。また、時代が下り、国分寺建立に至っては、飛驒国分寺瓦の祖形が地方寺院のひとつである三仏寺廃寺跡に求められるため、在地勢力が行ったものと述べた。そして、このような同一国内の地方寺院に瓦の祖形が求められる点は、全国的にも普遍的な成立過程であることを述べた。

この 2 点については、飛驒を題材に地方寺院の成立と展開の一事例を本稿で提示することができたものと考えられる。

今後は瓦だけでなく、須恵器や土師器等の他の遺物や伽藍を構成する遺構からも検討を行い、本研究での結論に検証を加えていきたい。

卒業論文要旨

富山県ウワダイラ I 遺跡における剥片生産技術の再検討

山場愛弓

石器は、日本の旧石器時代を探ろうとした際ほとんど唯一の手がかりとなる遺物である。そのため、石器の有するあらゆる属性が考古学の研究の対象となる。石器が製作される際の、剥片生産技術の復元は石器群を理解するための方法論のひとつである。

富山県内でも後期旧石器時代の剥片生産技術に関する研究が行われており、今回対象とする南砺市ウワダイラ I 遺跡でも、既に 2 通りの技術の存在は確認されていた。しかし、当遺跡は未だ多くの未整理資料を残し、十分な検討が行われたと言えないのが現状である。そのため、本論では、未整理資料を分析することによって、ウワダイラ I 遺跡における剥片生産技術の再検討を行うことを目的とする。

研究の方法としては、未整理資料の接合と実測を行い、観察・分析する。また、ウワダイラ I 遺跡の資料について再整理を行った田上和彦氏から、資料 1 点 1 点の器長器幅等の詳細なデータを提供して頂けたため、このデータを使用して散布図を制作し、その結果からも分析を行った。

分析の結果、既に指摘されていた、素材となる大型の剥片の両縁から順次打点を移動させながら剥離を進行する技術、分割礫を素材として 90 度の打面転移を繰り返しながら剥離を進行する技術の 2 通りを改めて確認することが出来た。特に後者の技術を示す資料が多く観察された。技術は異なっても剥片の性質自体に大きな違いはないように見受けられる。母岩別にみると、素材は同じ母岩を利用しているのに、使用される技術は異なる資料を数点確認した。

また、今回検討した資料は全て、玉髄か鉄石英を石材としたが、玉髄と黄色の鉄石英から剥離される剥片はほとんどが長さ・幅共に 3 cm 前後もしくは以下に収まるのに対し、赤色の鉄石英からとられる剥片は 4 cm を超えるものが多かった。これは赤色鉄石英の質が他の石材に比べて悪いように感じられたことが関係すると推測した。

以上のことから、ウワダイラ I 遺跡には従来いわれていた 2 通りの剥片生産技術がやはり存在すると結論付けた。そして、それらは製作者の違いや、得られる剥片の性質の違いを目的に使い分けられている訳ではなく、得られた素材の形状・材質によって随時使い分け・組み合わせが行われていたように考えられる。

今回検討できた資料は未整理資料の全てではないので、残る資料の分析及びそれらを含めた全体の資料の分析が今後の課題である。

貝塚からみた縄文時代の生業形態の再検討

金田 朋子

縄文時代の生業は、漁撈・狩猟・採集の3つの基本的活動を、季節によって活動の組み合わせを変化させることで、年間を通し食料資源を安定して獲得していたとされている。近年は、狭い地域であっても生業の構成が異なることや同一の資源を利用しているにもかかわらず季節性スケジュールが異なることなどが指摘されている。そこで、本研究では生業の季節性スケジュールに注目し、食料残滓が比較的多く残る貝塚遺跡での生業形態の再検討を行った。

対象遺跡には富山県氷見市に所在する上久津呂中屋遺跡を選んだ。その理由としては、出土貝類に関して貝殻成長線分析が行われており、貝類の採集季節が具体的に分かると考えたからである。

研究の方法としては、樋泉岳二が愛知県田原市に所在する伊川津遺跡でおこなった生業の季節性スケジュールの復元方法を参考にし、上久津呂中屋遺跡の資料を使って資源の利用可能な季節の推定を行った。また、上久津呂中屋遺跡での結果を伊川津遺跡のものと比較を行った。

その結果、上久津呂中屋遺跡での貝類採集活動は、浅い内湾の海水域に生息する貝類を採取し、出土貝類の種類から比較的幅広い採集であったと推測できる。出土貝類個数比の割合を見ると、二枚貝のサルボウガイ・アサリ・マガキなど食用性の高い貝類に混じり、食用とは考えにくいウミナナ類・アラムシロなどもあることが分かった。採集時季は春～夏を中心としていたことが貝殻成長線分析によって推定された。また、漁撈活動に関して出土魚骨の総数とその生態から、特定の魚種に偏りがあるのかを調べた結果、外洋を回遊するサメ類・カツオ・マグロ属、季節により外洋～内湾を回遊するサバやニシン科、湾口～湾奥域に生息するタイ科・エイ・ヒラメ・スズキ属などの魚骨が出土し、外洋～内湾までの広い海域を対象とした漁の存在が推定できた。貝塚の形成時期により差はあるが、出土骨の割合から全体的に、外洋～内湾の魚類が多く出土している。一方、淡水性・汽水性の魚類の骨は出土しておらず、河川や池が遺跡の近くに存在していたとは考えにくい。

伊川津遺跡との比較から、両遺跡での貝類採集活動は海水の温度が高くなる春～夏が中心であったことが言える。伊川津遺跡では特定の貝類を選択して採集季節を変化させていた点が指摘されているが、上久津呂中屋遺跡での貝殻成長線分析が行われた資料に限りがあったため、種類によって採集季節を変化していたかについてあまり検討出来なかった。貝類の個数比からは、伊川津遺跡は特定の貝類に偏りが見られ、上久津呂中屋遺跡では見られなかった。このことから、採集と廃棄方法に遺跡での社会性の違いが反映されている。

また、漁撈活動に関しては、出土する魚の種類から上久津呂中屋遺跡では外洋性漁業の可能性が指摘できるが、本研究では、生業活動を支えた道具についての検討を行っていないため、今後は生業活動に使用された道具類と合せた考察が必要である。

圀形埴輪の研究

―分布と出土古墳からみた圀形埴輪の性格について―

寸田彩加

圀形埴輪は、4世紀末から6世紀初頭までみられる形象埴輪で、平面形態には鈎の手形と方形があり、山形突起と呼ばれる鋸のような突起が壁の上部に見られる。性格については様々な学説が唱えられているが、これらがどのような違いを持つのかは明確にされてこなかった。そこで今回は、出土古墳と埴輪の出土位置、その他の埴輪（特に家形埴輪）との関係から圀形埴輪の性格を検討していく。

分析方法は、まず圀形埴輪の詳細なデータ（形状や共伴するものの有無など）をまとめ分析し、型式分類を行い、その後その結果と圀形埴輪出土古墳の規模や形状および埴輪の出土状況のデータ、また圀形埴輪の出土した古墳の分布図を時期ごとに分析する。そして、地域的広がりに関連させて3つの項目をまとめ、圀形埴輪の性格について考察していく。

分析の結果、まず型式分類では主に6種類に分類でき、それらが時期によって変化していくことが分かった。特に山形突起を入口部分にしか持たないものが4世紀末には中心だったが、5世紀になって山形突起を全周するものが中心となっていくことが注目できる。これは、山形突起が僻邪の意味をもつと考えられていることから、この僻邪の意味が過度に強調され山形突起が全周するということに変化していったのではないと思われる。性格については、4世紀末では祭殿などの特殊な施設を囲う性格を持っていたと考えられ、この性格は畿内を中心として各地に広がっていったと考えられるが、可能性として指摘するだけにとどめる。その後、5世紀に入って導水施設を囲う性格を持つようになったと考えられ、古市古墳群や馬見古墳群を中心として各地に広がっていったと考えられるが、その際規模の制約か古墳の形態による違いか、すべての古墳に同様の性格が伝えられたのかは分からない。そして、5世紀の中頃までこの性格を確実に持ち、後半になって性格が変化していくと考えられるが、どのような性格を持つのかは検討できなかった。それは、畿内の古墳から圀形埴輪が出土していないことなどから考えられ、各地の圀形埴輪の出土状況から圀形埴輪が形骸化して使われ続けた可能性も考えられる。5世紀末頃になると規模の小さい古墳にのみ置かれることから、この時期をもって圀形埴輪の古墳への採用が終わりを迎えると考えられる。

以上のことから、圀形埴輪の性格は、従来考えられている通り様々にあるが、それらの性格は時期的に変化していくと考える。また、地域的な広がりも見られるが、古墳の規模や形態の差で畿内から確実に性格が伝わったかどうか異なる可能性も考える。しかし、圀形埴輪の形態差と性格の変化がどのような関係があるのかなどは検討しきれなかったので、今後の課題としていきたい。

陶硯からみた古代越中国の識字層の広がり

清水俊輝

古代において、陶硯を使用して文字の読み書きができる識字層は、文字を習えた役人などのごく一部の人間だけで、農民などは文字を書くことはできなかった。そのため、陶硯が出土することは、役人などの識字層が使用していたためであり、陶硯の分布状況は、識字層の分布と関係があると考えられることができる。

また、富山県内における陶硯研究では、陶硯の集成、型式学的分類、編年、生産状況など、陶硯の形態に関する研究や、陶硯出土遺跡についての研究が中心にされているが、陶硯を使用する識字層に関しては、研究が進んでいない。そのため、古代越中国における陶硯の分布状況から、識字層の広がりについて考えることができるのではないかと考え本論の目的とした。

分析の対象とする遺物は陶硯で、対象遺跡は古代越中国の陶硯出土遺跡 55 遺跡であり、遺跡の種別から消費遺跡 45・生産遺跡 9・墳墓 1 に分けられる。

分析方法として、古代越中国の陶硯出土遺跡の時期・地域・数量の分布図を作成し、分布状況の検討を行った。

分析の結果、7 世紀末に陶硯を出土する遺跡が出現し、8 世紀には各郡の遺跡に陶硯が広がり、遺跡数が最も多くなり、特に西側の遺跡で出土量が多い傾向が見られた。9 世紀にも 8 世紀に引き続き陶硯が出土する遺跡は多いが、この時期に東側で出土量が多い遺跡が出現し、また、さらに一部の地域に陶硯が広がった。しかし、10 世紀には陶硯出土遺跡と陶硯は減少し、広がりは見られない。

以上のことを遺跡の性格や識字層の観点をもとに考えると、7 世紀末に官衙的な遺跡で識字層が出現し、遅くともこの時期には、古代越中国で文字による支配体制が始まっていたと思われる。8 世紀には、官衙的な遺跡を中心に識字層が各郡に広がるが、識字層は、西側で多く、東側で少ない傾向があり、文書行政が西側で特に積極的に行われていたことが考えられる。そして、9 世紀には、同じ地域に識字層が存在することが多く、荘園開発などによって広がりが見られた。また、8 世紀では西側で識字層が多かったが、9 世紀には、文書行政を行うための役人が、東側でも増加したと思われる。

戦国期の越中において使用された山城についての検討
—長大な堅堀をもつものを中心として—

小谷望有季

富山県内では、現在約 306 箇所の中世城館が確認されている。そのうち、山城の堅堀という防御遺構について注目して見てみると、富山県内では横尾城(朝日町横尾)の堅堀が最も長大で、長さは約 90m ほどである。堅堀は、山城において斜面防御で大きな役割を果たす防御施設である。山城の斜面に平行して下方へ伸びる空堀であり、敵兵の斜面の横移動や、尾根伝いの斜面からの侵入を防ぐ役割がある。横尾城には、明確な史料や遺物などが確認されていないことから、使用年代・時期・築城者などは不明である。しかし、現存する遺構には、長大な堅堀の他、曲輪に沿って造られた未完成の横堀、尾根筋を遮断する堀切など現存している。そこで、本稿では横尾城に残存する遺構と、築城の特徴を縄張図から読み取り、築城の傾向から築城者を推測する。また、長大な堅堀のもつ役割についても検討したい。

分析方法は、横尾城とその周辺に位置している山城、越中を実質支配した経歴を持つ上杉氏・佐々氏の山城を中心として、各山城について分析する。堅堀・横堀などの遺構の規模や形状の比較、縄張から読み取れる築城の特徴などを挙げ、横尾城がどの勢力の城の傾向と類似するか比較を行う。

分析対象とした山城は越中宮崎地域の山城(横尾城・元屋敷城・上百山砦・扇山砦・升方城)、越中越後国境付近の山城(勝山城・根小屋城・金山城・不動山城)、加賀越中国境付近の山城(松根城・一乗寺城・源氏ヶ峰城・荒山城・坪井山砦)である。主に戦国期に使用されたと判断できるものを分析の対象とした。

分析結果は、堅堀による規模・形状比較では、堅堀の長さの平均が他の山城より比較的長大な傾向にあり、堀の形状が類似することから横尾城と不動山城(新潟県)の堅堀の類似を指摘できた。横堀による規模・形状比較では、横尾城と同等の横堀規模を持ち、曲輪に堀が直接取り付くという性格の点で共通した遺構をもつ佐々氏の山城の松根城(富山県)の横堀との類似を指摘できる。横尾城にみられる特徴的な遺構が、それぞれ異なる勢力の特徴を表すものであることから、横尾城の遺構は、上杉氏支配の際に長大な堅堀が施され、天正年間の佐々氏支配の際に近接する宮崎城の攻撃に伴って、横堀や櫓を伴う墨線土塁などの防御遺構が加えられたのではないかと考える。横尾城は、上杉氏と佐々氏の両者の特徴をもつ城であることから、その両者によって使用・改修が行われた山城ではないかと考察した。

また、横尾城の長大な堅堀の役割についても検討した。西股総生氏の論を踏まえて考察すると、横尾城の長大な堅堀は、城の背後から低地へ退避する退路の機能も備えていたと考えられる。堅堀が上杉氏の支配の際に築かれたとすれば、横尾城の背後の北側斜面から笹川方面に山を下り、笹川を下って海岸線へ抜ける退避経路が考えられる。

修士論文中間報告要旨

中世前期における大型総柱建物の発生について

人文科学研究科人文科学専攻 1 年盛田拳生

富山県下では古代から中世にかけて多数の遺跡が存在するが、8 世紀から 9 世紀にかけて隆盛した古代集落遺跡は 10 世紀までには衰退するものが多い。また 11 世紀になると確認できる遺跡は極端に減少する。その後 12 世紀中頃ないし後半からは集落遺跡の数は再び増加傾向に転じ、中世後期まで長期間にわたって存続する例も多い。県内の遺跡ではこのような様相が見てとれるが時期に合わせて建物構造も変化している。8 世紀から 10 世紀まで掘立柱建物（側柱）や竪穴住居が主流であった集落は、11 世紀という空白期を挟んで 12 世紀に入ると掘立柱建物（総柱）が主流となる。また総柱建物の規模も比較的小型のものから大型のものへと変化している。

古代の集落が 10 世紀までに衰退することについては諸説あるが、経営が不安定であった初期荘園の断絶や列島規模の集落再編との関係で論じられることが多い。また 12 世紀に入り劇変する集落構造については、同時期に出現する京都系非ロクロ土師器から畿内との関わりについて論じられている。その他、院政期中世荘園（領域型荘園）が立荘されはじめることも広く生じた現象として認識されている。しかしながら古代集落が中世集落へと変化した具体的な理由について論じた研究はまだ少ない。

修士論文では集落のなかで総柱建物がどうして大型化し、何故広く受容されたのかについて論じていきたいと思う。そのためにはまず古代から中世への転換期である 11 世紀の様相を確認したいと考え、今回は県内で 11 世紀を中心に営まれた遺跡を収集し、なかでも掘立柱建物が検出されているものを分析した。その結果、側柱建物を中心とする遺跡が多かったが、小矢部市五社遺跡では 10 世紀末から 11 世紀前半までの側柱建物中心から 11 世紀後半頃の総柱建物中心（比較的大型の 4×4 間が最大）へと変化する様相がみてとれた。またこの様相が石川県三木だいまん遺跡と酷似していることも確認できた。三木だいまん遺跡では 12 世紀初頭から中頃までは小規模な集落だが 12 世紀後半から大型総柱建物が出現する。文献によると「助方」なる人物が開発した段階とそれを位田とし藤原宗行が立荘した段階があったとされるが、それぞれの段階が集落の変化する時期と一致している。

これらのことから地域差がある可能性を指摘しながらも、概ね中世荘園（領域型荘園）の立荘時期と総柱建物が大型化する時期が同一であるとした。またそれらの現象は三木だいまん遺跡の事例から、荘園の実質管理を任されている預所職が行なったものであると考えた。

課題としてはこの仮説を全国の遺跡と対比させ、より具体的な実態を解明することである。

平成 25 年度富山大学考古学研究室修論・卒論発表会

日時：2014 年 3 月 8 日（土）13 時～

場所：富山大学人文学部 2 階 第 4 講義室

当日のスケジュールは以下の通りです。（順番が入れ替わることもあります。）

聴講は無料で、申し込みは不要です。皆様ふるってご参加ください。

お問い合わせ等がございましたら 076 - 445 - 6195（富山大学考古学研究室）もしくは
tomidai_kouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【修士論文】

- ①三好清超「古代における地方寺院の成立と展開 —飛騨国の事例を中心に—」

【卒業論文】

- ②山場愛弓「富山県ウワダイラ I 遺跡における剥片生産技術の再検討」
- ③金田朋子「貝塚からみた縄文時代の生業形態の再検討」
- ④寸田彩加「圀形埴輪の研究 —分布と出土古墳からみた圀形埴輪の性格について—」
- ⑤清水俊輝「陶硯からみた古代越中国の識字層の広がり」
- ⑥小谷望有季「戦国期の越中において使用された山城についての検討—長大な塹堀をもつものを中心として—」

【修士論文中間報告】

- ⑦盛田拳生「中世前期における大型総柱建物の発生について」

追い出しコンパのお知らせ

春の陽気が待ち遠しい今日この頃、みなさまいかがお過ごしでしょうか。

さて、富山大学考古学研究室では、3月8日（土）の修士論文・卒業論文発表会の後に追い出しコンパを開催します。ご多忙中かとは思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：3月8日（土）

場所：一次会…食空間 SHOW-WA 時間 18時～20時 会費 6000円
二次会…居酒屋ほそかわ 時間 20時～22時 会費 2500円

※参加を希望される方は3月1日までに tomidai_kouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。

※費用は出席者の人数によって多少前後することがありますので、ご了承願います。

一次会と二次会の場所については、下記の地図をご覧ください。

一次会 食空間 SHOW-WA



二次会 居酒屋ほそかわ



編集後記

寒さ暑さも彼岸までと申しますが、まだまだ寒い日が続いております。

2月も終わりに近づき、そろそろ春の足音が聞こえてまいりました。春は先輩方とお別れをする季節、そして新しく2年生を研究室に迎える、うれしくも寂しい季節です。

卒業される先輩方は、富大考古通信に原稿を提供していただきありがとうございました。これから困難も多いかと思いますが、しっかりと自らの道を進んでいかれることをお祈りしております。

今年の春からは、2年生が6人入ってきます。新しい仲間を迎えて、研究室がますます楽しく、そしてみんなで協力して学ぶことができる場となるよう、一同頑張っております。

(奥勇介・矢野実沙希)

富大考古通信 第十六号

配信日 2014年3月3日

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福 3190

TEL 076 - 445 - 6195

留守番アクセス 4000 BOX 番号 6195

HP <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kouko/index.html>

メール tomidai_kouko@yahoo.co.jp

※メールにつきましては、迷惑メールと区別するため、タイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力してください。ご協力お願いいたします。